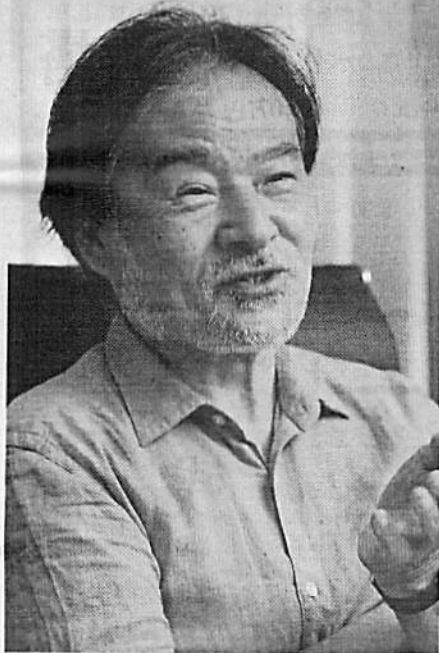


# 長い歩みの先に「銀獅子賞」

「スパイの妻」

監督 黒沢清



「社会の規範に個人が合わせるかどうか、コロナ禍のマスク(着用)で一目瞭然になったことに驚いている」と語る黒沢清監督

映画ファンにとっては、驚きよりむしろ待ちわびた吉報だっただろう。新作映画「スパイの妻」で第77回ベネチア国際映画祭監督賞(銀獅子賞)を受賞した黒沢清監督(神戸出身)。「長い歩みがあったからここまで来られた」という受賞後の言葉通り、自主映画時代から先鋭的なスタイルを貫き、観客を引き付けてきた。「スパイの妻」は自身初となる歴史ドラマ。太平洋戦争

前に恐ろしい国家機密を知った夫(高橋一生)と妻(蒼井優)が、正義感から世に知らしめようとする姿を描く。「社会に分かりやすい規範があるとき、個人が規範に合わせるのか、規範から離れても自分の思いを遂げるのか。極端に試された時代の話」脚本は浜口竜介、野原位との共作。時に周囲をあざむきながら、夫への愛を貫こうとする妻は「僕には絶対に書

## 個か規範か「試された時代の話」

けない女性像」など言う。「社会から離脱したり、社会を滅ぼそうとしたりする男性は僕にも書けるが、この女性は社会にとまりながらも決してのみ込まれない。この行動力と逸脱は一体何なんだ、と」自身は愛妻家で知られる。海外映画祭には毎回のようには妻を同行していたが、今年も新型コロナウイルス禍で断念。受賞後、日本で会見し「夢のような瞬間を妻も眺めることができたのかと思うと残念」と悔しさをにじませた。立教大在学中に受講した映画評論家、蓮実重彦の授業に多大な影響を受けた一人。「蓮実さんの言葉は、いちいち本当にそうなのか」と映画を見て確認したくなるんです」。配信はおろかビデオもない時代。通称「フィルムセンター」(現国立映画アーカイブ)で小津安二郎特集を食い入るように見て「本当にそうだった



「スパイの妻」の一場面 ©2020 NHK/NEP, Inc. cineC&I

と感動した」。87自主映画が長谷川和彦監督の目に留まり、制作集団「ディレクターズ・カンパニー」へ。「神田川浮城戦争」で1983年に商業映画デビュー。以降は話題作を次々発表した。「僕は今も当時のやり方から抜け切れていない。ヒットしたとか評価とか、のらりくらり受け入れてはいますけど本当は作品を完成させることだけが望みです」。◇1時間55分。16日から神戸国際松竹などで公開。

10月16日 金曜日 神戸新聞夕刊より

こんな時期であっても是非銀幕に向かい合ってみたい作品です。いろんな観点で感性を育てほしいものです。